書　評

川合泰代 著
『聖地への信仰―地理学からのアプローチ』
古今書院，2020年2月　236頁　4,800円＋税

「現代人が，自らの価値観で構築していく新しい聖地への信仰文化構築に，本書が少しでもお役に立つことができたら，望外の喜びである」と，「はしがき」にある聖地研究が出版された。川合泰代氏が2018年に奈良女子大学に出された学位論文がまとめられたものである。

本書カバーに載せられた山梨県の河口湖からみた富士山の美しい姿に見とれて，思わず手を合わせた。これが聖地なのか，本書を読む前に悟りの境地に入ってしまった。

「はしがき」の最初の一文に「人が生きていく上で，聖なるものは必要なのではないだろうか。」とあり，その思いが「聖地への信仰」研究の始まりであったという。著者の答えは「もちろん，必要である。皆さんにとっても」である。

「聖地」とは何？と問いかける読者に対して，序章で，エリアーデによる聖なるものと聖地についての解釈，地理学史のなかでの聖地研究，聖地への信仰の構図を示すなど，丁寧な説明がなされて，本研究の意義が説かれている。本書の構成ははしがき，あとがきの他に，実証研究の成果を収めた次の本論2部6章と補論からなっている。

序章
第1部　聖地への信仰における身体と文化
　第1章　聖地的山里室生の景観の構造
　第2章　江戸・東京の富士講による富士山信仰
　　―富士塚から―
　第3章　江戸の富士講と庚申
　　―「道」の陰陽五行思想から―
　第2部　聖地御蓋山・春日山への多様な信仰
　第4章　近世奈良町の春日講による信仰
　　―春日曼荼羅から―
　第5章　近世春日社神領民による信仰
　　―松苗から―
　第6章　現代人による信仰
　　―世界遺産登録後の春日山練成会から―
終章
　補論　「私」がいる地理学へ―「道」の思想に基づく東洋地理思想の再発見―

本書の内容を一言で紹介するとすれば，聖地とは何かという難問を，聖地と言う場所に注目し，その土地の社会と文化を関連付けて，聖地への信仰の変遷を考察した書物，といえよう。

本論各章の概要を紹介する前に，本書の副題に「地理学からのアプローチ」とあるので，序章のⅡに記してある著者川合氏の地理学者としての研究視座を確認しておきたい。人文主義地理学を「地理的空間を相対的な空間として，そこに生きている人間の立場から空間がどのように体験されているのかを問う視点を提供するから」と評価しつつも，「人間の心理が文化に大きく影響を受けているということを軽視する傾向がみられる」と批判し，「文化とは権力構造の影響を受けるものであるとする新文化主義の視点を受け入れ，文化に属する人々が感じている環境を，超越者としての研究者の視点ではなく，感じている人々に寄り添う立場を取りたい」としている。

本文の紹介に移ると，第1部の「聖地への信仰における身体と文化」の冒頭で，筆者の「聖地」定義が次のように述べられている。

「聖地は，聖なるものが現れる大地であることが必須条件である…聖地は人間が構築できるものではなく，大地そのものにそのような聖なる大地が存在し，それを宗教的人間が発見するのである」。その聖なる大地論が第1章で述べられている。山ふところに囲まれた奈良県室生の里が，何故聖地なったかを室生への山道を歩くことによってわかると言い，地理学のキーワードである「景観」を使って説明されている。もちろん空海ゆかりの真言密教の聖地であった点が大きいが，うっそうとした山道を通り抜け峠に辿りついた時に，眼下に桃源郷のような山里が目に入れば，誰しもここが聖地かと心に安らぎを感じるであろう。文化を介さない人間という存在にとっても，母体への回帰願望にも類似する心理的に好まれる景観の構造であり，室生に人々が聖なるものを感じる理

由の一つであると，している。

第2章，第3章で富士山が登場する。第2章では，まず文化を介さずに聖なるものが現れる大地として富士山を取り上げたうえで，文化を介した信仰社会が築きあげられていく過程を，江戸時代から現在までの東京における富士山信仰を富士講と富士塚に注目して論じられている。江戸時代，飢饉や打ちこわしの世相に対して世直しを説き，享保18年（1733）に富士山に入定した食行身禄（じきぎょうみろく）を慕うことによって富士山信仰が始まり，富士講が成立し，しばらくして誰しも実際の富士山に登るのと同じ体験ができるようにと富士塚が造られるようになった。それが近代の神仏分離令と廃仏毀釈，戦後の敗戦という権力構造の変化に影響を受け，富士講が減少し富士塚信仰もなくなっていったことが綿密なフィールドワークによって明らかにされている。

これも富士山信仰の一つであったのかと知ったのが「影拝所」である。朝，ご来光を拝むのではなく，太陽を背にして西方を見ると，朝霧の中に自分の影がうつり，その周りに虹がでる光景で，この現象を阿弥陀仏が来迎し，自分自身と一体化したと感じた場所だそうだ。評者は，かつて南アルプスを縦走中，富士山からの朝日で自分の影が西方の霧に写り，影の周りに円形の虹がかかり，手を振ると影も手を振り，自分が動くと影も虹も動くという不思議な体験をしたことがある。これをブロッケン現象と言うが，まさか富士山信仰として礼拝されているとは，うれしい発見であった。

第3章では「道」の陰陽五行思想から富士講の成立が「庚申」にありと解き明かされた。「『道』とは，形がなく，名がないが，常に天地を育て，日月を動かし，あらゆる生き物を養っている」という老子の言葉に感銘を受けた著者は，それを自身の学問・人生の指針としているだけあって，干支と時間・空間・人に関する基礎知識が詳細に記されている。この基礎知識によって，富士講がなぜ庚申であるかが理解できる。富士山の誕生が庚申の年であったからで，60の干支の組み合わせの中で，「陽」で「金」にあたるのは庚と申のみであったからである。申は，陽（天）が転じて陰（地）が始まる時にあたるとともに，地支の強力な三つの結びつきのうちの，申－子－辰という水の三合の組み合わせの始まりにあたる。富士山は，大地に流れる水のはじまりの場所でもあった。見て美しい場所だけではなく，実益の原点の地でもあったことから聖地としての重みが増したものと思われる。

第2部の「聖地御蓋山（みかさやま）・春日山への多様な信仰」では同じ聖地であっても，文化を介して行われる聖地への信仰はそれぞれの社会：近世奈良町の春日講（しゅんにちこう），近世春日社の神領民，現代の春日山練成会，に応じて異なることが明らかにされる。

第4章では近世奈良町の春日講の人々の御蓋山・春日山信仰を，彼らが儀礼で用いた春日曼荼羅の分析をとおして実証される。御蓋山と春日山を背後に持つ春日大社や興福寺のある地で，古代から「春日」の信仰文化の根幹は，御蓋山の木々が青々としていれば春日明神は山に坐し，木々が枯れていれば春日明神は山を去ったと考える思想であった。このあたりの風景を描いたのが春日曼荼羅で，神社，参道の他に松・杉・柳は青々と，桜・梅は咲き誇った状態で描かれている。描かれ方が若干違うものの，こうした曼荼羅図を明治期に21町が所有していて，木々を神聖とした儀礼が続けられている。著者は近世奈良町の春日講からみた「聖なる風景」とは「聖地」である御蓋山一帯において，植物がエネルギーに満ち溢れた，象徴としての春の風景であったことを明らかにした。

第5章は，近世春日社の神領民が，聖地である御蓋山や春日山を，彼らの文化を介してどのように信仰していたのかを，春日社の御田植祭りと春日社旧神領の水口祭における松苗儀礼を，連続した祭りとして，分析している。何故御田植際に松苗かと言うと，松苗は，稲の種籾が発芽して，青々と茂る早苗になった姿を象徴していて，春日の神は，松葉を米にする力があると信じられているとのことである。そして御田植祭で用いられた松苗は，近世まで春日社の神領であった農村でのみ各農家に配られ，水口祭りの際に苗代の水口に飾られた。この両祭りを結び付けて考察した研究は従来なされていないとのことで，著者自信の作になっている。

第6章の「現代人による信仰」では，春日山練成会の新企画に注目し，新たな聖地信仰を見出している。1998年に春日山原始林が世界遺産に登録されたことから，春日大社では春日山練成会を発足させ，従来立ち入り禁止であった地区を開放

し，いくつかの社を巡りながら原始林を歩くコースを設けた。この山歩きに4回参加した著者は宗教や民族の違いに関わらず，春日山を聖地として尊重し，拝する人なら誰しも登拝することができるという信仰文化が出来上がったと，感じ取った。

こうしてまとめてみると，聖地が「文化」との関係で論じられていることがわかり，「文化」なしでの聖地の実在性と，「文化」による聖地の社会的構築性，この両者をあわせて論じた点に著者のオリジナリティが伺える。富士講も春日講も江戸時代の宗教と結びついた信仰文化であったが，近代・明治になって神仏分離，現代・昭和中期になって敗戦という大きな権力構造の変化に伴って，「講」の数も減少し，過去の信仰文化が受け継がれなくなっている。そのなかで，春日山練成会の活動は，現代社会においては珍しく，信仰心をともなった聖地への新しい信仰文化だと評価しつつ，その内容において春日大社の神を信ずることは強制されてはいなく，個々人の価値観で信仰すればよいというゆるやかな文化になっているとその違いを指摘している。

ここで評者が考える「文化」が著者の「文化」と少々異なるな，と思った点を挙げておきたい。著者は時間と地域が限られた小地域社会で生み出されたものとして「文化」を捉えている。それ故に，時間も空間も無制限の富士山と室生寺自体については「文化を介さない地」として採り上げているが，評者は文化の枠を階層的に捉えて家単位の小地域から村，国，世界の文化もあり，として富士山も室生寺も人なら誰しも見ただけで神聖，と感じる大スケールな文化の地としてもいいのではないかと思う。

この「文化」もそうだが，本書は，日頃われわれが意識せず見聞きし，使っている言葉について，その意味を，一度じっくりと考えねば，と思わせてくれる。キーワードとして繰り返し出てくる「聖地」，「大地」，「道」などがそうで，補論で著者が述べている「道」の思想に基づく東洋地理思想の再発見，とまで格調高く自分を見つめる境地にまではいかないにしろ，こうした言葉と向き合って自らの思考を高めていきたいと刺激を受けた。

さて，本書で著者の篤い思いが伝わってくるのは，本書が研究成果の単なる総まとめの本ではなく，本書評の冒頭に示した一文のように現代人の読者に「新しい信仰文化の構築」を期待したいと呼び掛けていることである。評者としてもそれに応えなければいけないと思い，個人的な体験からふたつの事例を記して結びとしたい。

動かない大地としての聖なる山といかに向き合うか。学生時代，休日になれば山登り，という生活を続けており，初めての海外は山国と決め，ネパールに出かけた。アンナプルナ山群に囲まれたヒマラヤのマッターホルンとも称されるマチャプチャリに見とれていた時に，同行のシェルパが，「海外からの初登頂者であるイギリス隊は地元民の信仰の山に敬意を表し，神が宿る頂上に足跡は残さなかった」と話してくれた。日本でも多くの山は聖なる山で山頂には神が祀られている。ある年，日本山岳会所属の金沢大学の鹿野先生一家と立山登山に出かけた。その際，我が家族が山頂に登り万歳を叫んでいたとき，鹿野先生家族は山頂を眺められただけで1メートル下の山道をさりげなく進んで行かれた。聖なる山頂に足跡を付けない，という文化をお持ちのようで意外であったが，その行為が心に残り，以後私の登山もそのように変わった。私にとって新しい信仰文化が誕生した山歩きであった。

二つ目はお地蔵さんに登場していただこう。今年（2020年）になって名古屋で江戸を探す試みを始めた。名古屋の町は第二次世界大戦の戦災で丸焼けになり，伊勢湾台風では大洪水に遭ったため，江戸時代の建物に出会うことはなかった。ところが2月3日の節分の日に自宅近くで前田利家ゆかりの地の荒子観音に出かけたら，境内に20体のお地蔵さんが祀られており，年配のご婦人が手を合わせておられた。弘化2年（1845）築造とあった。専門書によると，江戸時代ほど地蔵信仰が民衆の生活の中に溶け込んでいた時代はないとある。そこで近在のお寺を数か所訪ねたら，子安地蔵，水子地蔵，それにキリシタン地蔵もあり，住民の方の好意で毛糸の帽子や前掛けをしたお地蔵さんも多かった。浄土宗，浄土真宗，曹洞宗，真言宗と宗派が違うにもかかわらずお地蔵さんが見られたということは，宗派の壁を超えた仏教の原点をお地蔵さんが担っているのか，と感心した。

「聖地」に備わっている畏怖も感じない。「1cmも移動しない」聖地でもないし，お地蔵さんのあ

る場所は大地でもなく聖地とは言えないかもしれない。しかし現代になって多数生まれた宗教心のない聖地（パワースポット，アニメの舞台，スポーツ選手・アイドルグループゆかりの神社）とは違い，これほど誰隔てなく万人に宗教心を持たせてくれるスポットはなかろう。近くにある聖地としてお地蔵さんを「新しい信仰文化の構築」の場として見守っていきたい。

（溝口常俊）